

科学的事実論争と理論受容概念

工藤怜之 (Satoshi Kudo)

東京大学大学院総合文化研究科・日本学術振興会特別研究員 DC

科学的事実論争は科学哲学における主要なトピックのひとつであるが、その争点が一体何であるのかを述べることは容易ではない。様々な論点が提起され、それらが複雑に関係しているということもあるが、論者によって科学的事実論／反事実論の定式化が少しずつ異なっていることもまた、その原因のひとつであろう。事実論者たちは概して、認識論的な主張を含むものとして、自らの立場を定式化しようとする。すなわち、成熟した科学分野の成功理論はよく確証されている、といった主張をする。これはおそらく、事実論者たちの中心的動機がいわゆる「奇跡論法」の維持にあるためだろう。科学の大きな成功を目の前にしながら、その(近似的)真理性を信じない(信じるべきでない)というのは、奇妙な認識的態度であるように思われる。ところが、事実論者たちにとって事実上の最大の論敵とみなされている van Fraassen は、論争の第一義的争点を認識論的なものとは捉えていない。彼の定式化では、科学的事実論／反事実論とは、科学の目的は何か、また、科学理論の受容とはどのような態度であるかに関する立場であるとされている。このように、事実論者とその論敵は、一見したところでは異なる問題の立て方をしている。二つの定式化の間の関係を明確にしなければ、科学的事実論の問題に取り組むことがいかなることであるのかははっきりと把握することができないし、両陣営の議論が食い違ってしまうおそれもある。

科学的事実論争の論争構造を明確にしたいという動機を背景として、本発表では、van Fraassen による定式化に依拠した場合、論争の争点が果たしてどこに帰着するのかを検討する。科学の目的は何か、という問いに答えるにはどうすればよいか。van Fraassen のアプローチは、何が科学の成功とみなされているか、特に、どのような理論が科学の成果として受容されているか、を見るというものである。そしてその結果として、彼は、真である見込みのより大きい理論がより好ましいものとして受容されるとは限らない、と主張する。というのも、より情報量の大きい理論を好ましいと判断することは、論理的に、より誤っている見込みの大きい理論を好ましいと判断することだからである。ここから彼は、理論を受容することが必ずしもその真理性を信じることにはならないと論じ、それゆえに、受容された理論は真であると信じられていると理解する事実論の立場を批判する(少なくとも、ある箇所ではそのように論じているように見える)。ところが、この議論にはいくつかの疑問点が提起される。第一に、理論を真であると信じることは区別される態度として、理論を受容するという態度は理解可能か。第二に、理論の持つ情報の豊かさと真である見込みの間に緊張関係があるとすれば、全く同じ関係が、情報の豊かさと経験的に十全である見込みの間にも成り立つのではないか。ひとつ目の点に対して van Fraassen は、理論を信じるべきよい理由と受容すべきよい理由の違いに訴えることで回答を行う。これらの理由の

違いを区別できるかどうかは、何を以って理論を信じるべきと考えるかという認識論に依存する。第二の点については、van Fraassen 自身も認めざるを得ないだろう。その上で、誤っている可能性を認めながら理論を受容するという科学の営みを合理的なものとするため、van Fraassen は独自の主意主義的認識論を持ち出すことになる。ところが、この認識論によれば、いかなる形式の拡張的推論による正当化も認められないため、理論を信じるべき理由というものに実質を与えられるかどうか疑わしい。そうだとすれば、信念と受容という態度の区別も明確ではなくなり、实在論と構成的経験論の間に本当の対立があるのかも疑わしくなるだろう。